北海道言語研究会
研究例会報告

2018 年度の研究例会は以下の日程とプログラムで開催。参加者諸氏の間で活発な議論が交わされた。

・第 16 回研究例会

（9 月 26 日（火）13:30--16:55; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室）

13:30--14:15

塩谷 亨

「ハワイ語における動詞修飾要素の区分について」

ハワイ語において、動詞の後ろには様々な副詞的修飾要素が付加される。ある動詞が副詞的に他の動詞の修飾をしていると考えられる場合と、副詞的接語が動詞を修飾していると考えられる場合とがあるが、その線引きは明確ではない。そこで、文法的及び意味的な側面から、線引きのための基準について考察する。

14:20--15:05

三村竜之

「デンマーク語のイントネーション研究の諸問題」

デンマーク語のイントネーションは先行研究が既に豊富にあるものの、その殆どが音響分析に基づく数理モデル化を目指しており、教育に応用可能な基礎的な記述資料は思いの外乏しい。そこで本発表では、発表者が採取した一次資料に基づき、文とリズムの仕組みや、個々の文の種類(例: 疑問文)と文末音調の型(例: 上昇調)との対応関係など、デンマーク語のイントネーションにまつ わる基本事項の解明と整理を試みる。

15:20--16:05

小澤卓哉

「フランス語の代名動詞受動用法における再帰代名詞について」

フランス語の代名動詞受動用法には潜在的で明示的に表すことができない動作主が存在し、藤田(2008)は再帰代名詞がこの θ 役割を持つと主張している。本発表では藤田の問題点を指摘した 上で、(1) そのような動作主は統辞的には存在せず語用論的推論によって得られるものであり、(2) 再帰代名詞単独では θ 役割を担わないと主張する。(2)は受動用法に限らないことを指摘し、共通して非対格性が関与している可能性について論じる。

16:10--16:55

白 尚燁

“Continuous aspect in Tungusic from the perspective of areal linguistics”

Continuous aspect in Tungusic from the perspective of areal linguistics. This presentation aims to examine a syntactic disparity in the strategy of creating progressive and resultative aspect, whether it is synthetic and/or analytic, among Tungusic in accordance with geographical distribution. Firstly, North Tungusic has a clear opposition between progressive and resultative aspect with the use of separate synthetic elements. On the other hand, analytic structure adopting distinctive use of converbs plus existential verb is predominant in South Tungusic. Interestingly, this analytic strategy is a common feature in the adjacent Mongolic languages. Finally, East Tungusic retains a mixed strategy of synthetic and analytic way of corresponding aspect effect. In conclusion, the syntactic feature of opposition between progressive and resultative aspect in Tungusic is considered to vary on the basis of areal distribution, showing a remarkable similarity with those of neighboring Mongolic languages.

・第 17 回研究例会

（3 月 22 日（金）14:00--17:00; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室）

14:00--14:45

塩谷 亨（室蘭工業大学）

「サモア語、タヒチ語、ハワイ語における副詞語類について」

サモア語、タヒチ語、ハワイ語等のポリネシア諸語においては動詞類に属する多くの語が語形変化なしで副詞（動詞修飾）用法を持つが、一方で、動詞類には属さず副詞類或いは副詞的小辞という語類に属するとして分類されるものが一定数存在する。同じく副詞的に用いられるこれら二種類のグループの文中での振る舞いの差異について、三言語を対照しながら分析する。

15:00--15:45

三村 竜之（室蘭工業大学）

「ノルウェー語のアクセントとイントネーション」

ノルウェー語（南東部方言）では、語は主強勢を担う音節を必ず一つ有し、その音節には（主として）「低平調」（アクセント 1）と「下降調」（アクセント 2）の二種類の音調が現れる。従来の研究では第一音節に主強勢を有する二音節語に考察の対象がほぼ限定されており、アクセント音調の本質を捉えきれていない。これを踏まえ、本研究では、先行研究に欠けていた多音節語や句、文の音調を精査することで

アクセントとイントネーションの分離を行い、アクセント対立において真に弁別的な特性の抽出を試みる。その結果、ノルウェー語のアクセント対立においては、主強勢を担う音節における下降調の有無のみが真に弁別的であると結論づける（アクセント 1: 下降無し; アクセント 2: 下降有り）。アクセント 1 の語には、任意で低平調以外の音調もあらわうるが、語彙レベルで音調を指定しない解釈をとることで、種々の音調の出現を説明することが可能となる。

16:00--16:45

藤田 健（北海道大学）

「ロマンス諸語における定冠詞の分布の違い」

ロマンス諸語に属するフランス語、スペイン語、イタリア語、ルーマニア語はいずれも定冠詞を有するが、その分布を詳細に観察すると、4 言語で完全に一致しているとは言えない。本発表では、各言語の定冠詞の分布の違いを、特にゼロ冠詞及び所有形容詞との関係に注目して、冠詞体系の発達の度合いという観点から捉え、各言語に見られる特徴を考察する。

『北海道言語文化研究』投稿規程

１.『北海道言語文化研究』への投稿は、資格を問わない。

２．投稿内容は、未発表であり、かつ投稿時に、他の学会等への発表の応募または投稿を行っていないものに限る。

3. 原稿の応募は『WORD』で読める形式のファイル (doc または docx ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイル、もしくは印刷したもの (1部)を提出する。
宛先:92hashimot@gmail.com

５．原稿の書式は、スタイルシートに準拠させる。
http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/index.html を参照。

５．本研究会による電子化による公開を、著者が本研究会誌に投稿した時点で許諾したものとする。http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/journal.html

６．締切は各年度の 11 月 30 日とする。

７．投稿された論文については、2 名の匿名査読者によって査読を行う。

８．掲載の可否は編集委員会が決定する。

９．著者による校正は原則として初校のみとする。訂正は誤植に限るものとし，内容の変更は認めない。

10. 印刷費は著者が実費を負担する（印刷費用によって変動あり）。

11. 稿料は払わない。

（2010 年 3 月）

スタイルシート

(1)使用言語:日本語もしくは英語。
(2)原稿:『WORD』で読める形式のファイル (DOC ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイル、もしくは印刷したもの (1部)を提出する。送付時に、 WORD のバージョンを編集委員に知らせる。スタイルシートのテンプレートおよびPDF化用のフリーソフトに関しては、本研究会の WEB ページを参照。 (URL: http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/)
(3)余白(マージン):上端 30mm 下端 25mm 左端 25mm 右端 25mm。
(4)行数:37 行。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
(5)字数:全角 39 文字または半角 78 文字。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
(6)フォント:和文は MS 明朝、MS P 明朝、英文は Times New Roman のみを認める。特殊文字を使用する際には、 unicode を用いることとし、その旨について投稿時に編集委員まで申し出る。
(7)ポイント数および書体 :

題名:	18 ポイント	太字	中央寄せ
氏名:	14 ポイント	太字	中央寄せ
要旨:	9 ポイント	「要旨」という文字のみ太字	
キーワード:	10.5 ポイント	「キーワード」という文字のみ太字	
本文:	10.5 ポイント		
セクション:	10.5 ポイント	セクション番号と題は太字	
謝辞:	9 ポイント	「謝辞」という文字のみ太字	
注:	9 ポイント	「注」という文字のみ太字	
参考文献:	9 ポイント	「参考文献」という文字のみ太字	

(8)タイトルおよび氏名:和文と欧文の2種類で書く。本文と同じ言語を先にする。和文の姓と名の間には全角の空白を 1 つ入れる。欧文の氏名は姓をすべて大文字にする (例:John BINTLET)。和文と欧文それぞれの間に 1 行の空白を入れる。
(9)ページ数:原則として図表を含め、 20 ページ以内とする。
(10)要旨:日本語でも英語でも可。場所はタイトルの下に 1 行空白を入れた後。分量は日本語の場合 400 字以内、英語の場合は 200 語以内。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)、両端揃えにする。
(11)キーワード: 5 つ程度のキーワードを要旨の下に 1 行あけて書く。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)。
(12)セクション (節):セクションの番号は 1 から始める。セクションおよびサブセクションの番号の形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。
(13)段落:両端揃えにすること。段落の最初の文字の下げ方等の形式は問わないが一貫した書き

方になっていること。

(14)注：通し番号をつけて脚注もしくは後注とする。通し番号の形式に指定はないが、一貫していることと、番号が行頭に来ないようにすること。ただし過去における研究発表情報等はタイトルの後ろに ＊（半角アスタリスク）を付加し、注の先頭で言及する。

(15)参考文献：文献は本文の後ろ、後注がある場合には注の後ろに付加する。形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。

(16)執筆者紹介：①氏名、②所属機関・部署、③メールアドレス、④ URI、⑤電話番号等を論文末に付加する。①は必須。②以降は任意で、その他の事項も付け加えることができる。現在の所属機関がない場合には、元～でも可。

（2014 年 2 月 6 日改定）

雑誌の作り方*

---------１行あける--------------------

ジョン　ビントレット（邦文）

---------１行あける--------------------

How to Make a Journal

---------１行あける--------------------

John BINTLET

---------１行あける--------------------

要旨：本稿では、雑誌の作り方について○○○

---------１行あける--------------------

キーワード：雑誌　校正　○○○○○　○○○○○○

---------１行あける--------------------

1.　（セクションの題）

本文はこちらから○○○

1.1.　（サブセクションの題）

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

---------１行あける--------------------

2.（セクションの題）

○○○○○○○○○

---------１行あける--------------------

謝辞

*　○○

---------１行あける--------------------

注（脚注でも可）

1　○○

---------１行あける--------------------

参考文献

○

---------１行あける--------------------

執筆者紹介
氏名：
所属：
Email：

注意：
①ヘッダーは偶数ページと奇数ページで設定が異なっています。
②テンプレートをダウンロードして使用する際には、既に打ち込んである文字を一文字残して入力してください。そうすると元の書式にしたがって、入力されます。全ての文字を消してしまうと、書式が異なってしまいますのでご注意下さい。

例：

1.　雑誌の出版形態

本文はこちらから〇〇〇

↓

1.　雑誌の出版形態

本現在のところ雑誌の出版の形態には、何種類...

↓

1.　雑誌の出版形態

現在のところ雑誌の出版の形態には、何種類...

セクションの本文を打つときには、「本」という文字を残して、その後から入力を始めます。その後「本」という漢字を削除してください。一文字でも入力すれば削除可能です。

北海道言語文化研究　　北海道言語研究会
No. 17, 2019.

How to Make a Journal*

---------１行あける--------------------

John BINTLET

--------- One line inserted --------------------

雑誌の作り方

--------- One line inserted --------------------

ジョン　ビントレット

--------- One line inserted --------------------

Abstract：〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇

---------One line inserted--------------------

Key words：〇〇〇〇〇　〇〇〇〇〇　〇〇〇〇〇〇

--------- One line inserted --------------------

1.　（Section Title）

〇〇〇

1.1.　（Subsection Title）

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

--------- One line inserted --------------------

2.　（Section Title）

〇〇〇〇〇〇〇〇〇

--------- One line inserted --------------------

NOTES（or foot notes available）

(*)　〇〇

(1)　〇〇

--------- One line inserted --------------------

REFERENCES

〇〇〇〇〇〇〇〇〇

--------- One line inserted --------------------

Author's Information: (Name is required; the others optional.)
Name: John Bintlet
Faculty, Institute or Company: Muroran Institute of Technology
Email: jbintlet　@mm.muroran-it.ac.jp

注意：
①ヘッダーは偶数ページと奇数ページで設定が異なっています。
②テンプレートをダウンロードして使用する際には、既に打ち込んである文字を一文字残して入力してください。そうすると元の書式にしたがって、入力されます。全ての文字を消してしまうと、書式が異なってしまいますのでご注意下さい。

例：

1.　雑誌の出版形態

本文はこちらから〇〇〇

↓

1.　雑誌の出版形態

本現在のところ雑誌の出版の形態には、何種類...

↓

1.　雑誌の出版形態

現在のところ雑誌の出版の形態には、何種類...

セクションの本文を打つときには、「本」という文字を残して、その後から入力を始めます。その後「本」という漢字を削除してください。一文字でも入力すれば削除可能です。

Editor's Note

I started writing this on my flight to Yangon, the capital city of Myanmar, or Burma as it is still known to many. This is my third trip to the country in less than nine months and each time I find myself agreeing with Kipling's observation that "it will be quite unlike any land you know about".

My visits are ostensibly professional; I am working as an adviser for the Japanese International Cooperation Agency (JICA) on a long-term project to reform the country's primary school curriculum. It is a hugely ambitious program involving the design and implementation of a new curriculum for all the subjects taught in public schools across the country. I am part of the team working on English. We have completed, to differing degrees of success, grades one to three, and we have just commenced grade four. My role encompasses everything from textbook design to audio recording to undergraduate teacher training.

This admirable ambition is, however, tempered by resource constraints. According to the United Nations, 26% of the country's 51 million people live in poverty; nearly 20% of children under the age of 5 are malnourished; and over a quarter of the population have no access to electricity or clean drinking water. For our project this means we must consider factors such as schools with only one classroom for all grades; untrained teachers; no access to audio-visual equipment; and a widening divide in the educational opportunities and outcomes between rural and urban areas. Hence, for all those involved in this curricular reform project, our unofficial motto is *dehtaat pomo pyu par raan* (do more with less). We concentrate on the fundamentals, on ensuring that what we do is the most pedagogically effective way of teaching students so that, despite the various limitations, they can still learn English.

This 'focus on the fundamentals', I believe, should also inform much of what we do in higher education here in Japan. We are saturated in teaching technology, in thrall to the (unproven) wonders of the web for learning another language. We are constantly buffeted in a slipstream of seemingly endless refinements to different teaching approaches. Research in the field of language education has increasingly become esoteric navel-gazing that offers insight only to the few, disparate acolytes who hoard its intricate secrets.

My discipline is Applied Linguistics but too much of the time the 'applied' designation of this title is overlooked or ignored. The suffocating need within higher education to 'produce' research papers as an administrative marker of academic quality is as misplaced as it is wasteful. This is not to completely denigrate research. The determination to further humanity's store of knowledge about ourselves and the world we live in is undoubtedly worthy and important. But when the world we live encompasses the sort of desperate poverty prevalent throughout Myanmar, then academic refinement in our ivory towers needs to take second place (or even third or fourth) to the demanding exigencies of the here and now. To merely research and publish is no longer enough. We must apply that research in a manner that has practical benefits for all, not just a minor citation in some inconspicuous journal.

B. G.

北海道言語研究会　URL: http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/index.html

本研究会は談論風発のくだけた雰囲気の集まりで、言語に関するあらゆる分野に興味のある方に開かれています。皆様のご参加、ご発表、ご投稿を心よりお待ちしております。

『北海道言語文化研究』への投稿について

本誌に研究論文の投稿をご希望の方は、スタイルシートに則った原稿を下記宛にお送りください。締め切りは11月30日です（消印有効）。原稿受領後、編集委員が査読を行い、掲載の可否を決定します。発行後、本誌を数部（印刷費用によって変動します）進呈いたします。スタイルシートに則ったファイルをご希望の方は、本研究会WEBページからダウンロードできます。ご活用下さい。

研究発表について

本研究会では随時研究会を開催しています。研究発表をご希望の方は、下記宛に発表の題目と要旨をお送りください。持ち時間は発表40分質疑20分です。発表者は抄録を『北海道言語文化研究』に掲載することができます。開催日時に関しては、受付後、後日メーリングリストや本研究会WEBページでお知らせする予定です。

北海道言語文化研究 第17号

2019年3月29日発行

発行者：北海道言語研究会

連絡先：92hashimot@gmail.com

〒050-8585

北海道室蘭市水元町27-1

ひと文化系領域

北海道言語研究会事務局

ISSN 1882-6296

北海道言語文化研究

第 17 号　　2019 年

論文

樺太アイヌ語における人称のクラスと主格目的格人称接辞―東海岸方言を中心に―　1
阪口　諒

樺太アイヌ口承テキスト「水汲みの話」の分析―述語的論理が優先された事例―　19
大喜多　紀明

イタリア語における時制の一致に関するルールの適用とその観点について　37
マリアンナ　チェスパ

Speaking Freely: Self-Generated Language in University English Class "Free-Talk" Activities　55
フォーイ ケネス

An Exploratory Survey of the Linguistic Landscape of Lake Toya　69
マイケル ジョンソン

スペイン語とルーマニア語における定冠詞の分布について　藤田　健　81

デンマーク語イントネーションの記述に向けて－ 基本概念と問題点の整理 －　105
三村　竜之

サモア語、タヒチ語、ハワイ語の動詞後置形態素 **ina**、**hia**、**'ia** の現れ方について　127
塩谷　亨

モンゴル語の使役文の意味の違いについて　橋本　邦彦　141

研究報告

大阪弁の「てんか」　福盛　貴弘　189

室蘭工業大学言語科学・国際交流ユニット「室蘭工業大学の語学教育における より良い動機づけのための多面的研究」研究成果報告-第 2 回-　橋本 邦彦（編）　201

北海道言語研究会

ISSN 1882-6296

Journal of Language and Culture of Hokkaido

No. 17 2019

Articles

The Classes of Personal Reference and Nominative- Objective Personal Affixes in Sakhalin Ainu—Focusing on the East Coast Dialects— Ryo SAKAGUCHI 1

Analysis of Folklore Texts "*wahka taa tuytah*" in the Sakhalin Ainu Language: Cases of Predicate-Logic Noriaki OHGITA 19

On the Proper Use of Sequence-of-Tenses Rules in Italian Marianna CESPA 37

Speaking Freely: Self-Generated Language in University English Class "Free-Talk" Activities Kenneth FOYE 55

An Exploratory Survey of the Linguistic Landscape of Lake Toya Michael JOHNSON 69

Distribution of the Definite Articles in Spanish and Romanian Takeshi FUJITA 81

Towards a Description of Danish Intonation: Its Basic Concepts and Issues Tatsuyuki MIMURA 105

Occurrence of Post-Verbal Morphemes *ina*/*hia*/*'ia* in Samoan, Tahitian, and Hawaiian Toru SHIONOYA 127

The Different Meanings of Causative Sentences in Mongolian Kunihiko HASHIMOTO 141

Research Report

On '*tenka*' of Osaka Dialect Takahiro FUKUMORI 189

"Research Project Report: Studies on Better Motivation in Foreign Language Learning from Various Angles -Part2-" by Linguistic Science and International Relations Research Unit, Muroran Institute of Technology Kunihiko HASHIMOTO (ed.) 201

The Hokkaido Linguistic Circle